



第4回 ジャーナリスト 中村俊介さん（インタビューシリーズ：歴史研究の隣人たち）

中村, 俊介
古市, 晃
市澤, 哲
井上, 舞
吉川, 圭太

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 15:58-84

(Issue Date)

2023-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100489536>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489536>



一 歴史との出会い

(一) 進学と就職

古市 本日は、お忙しいところありがとうございます。中村さんは朝日新聞社で編集委員として、主に埋蔵文化財に関係する分野に関わってお仕事をされてきていますが、そもそも大学ではどんな勉強をしておられたのでしょうか。

中村 私、文系といえば文系ですね。シルクロード、中央アジア史、西域史といわれるような分野です。卒論がエフタルとかクシャーンという一世紀から五世紀ぐらいの中央アジア、今のイランとかイラクとか、そのあたりの東西交渉史とか、交易史とか、とにかくシルクロードを勉強していました。

ですので、考古学ではないんですね。考古学はしょうがなく、会社に入ってから勉強しはじめたということなんですけれども、皆さんと同じく、文献史と言えば文献史です。

これをぜひという形で大学に入ったわけではないんですけども、結局、中学生のときに多分皆様、同じ世代だと、NHKのシルクロードを見ていたと思います。それで、ああ、いいなと、とにかくそういうところに行きたかったんですね。ですので、必然的に入りました。

あの頃は共通一次試験があつて大失敗をして

しまい、国立はあきらめたんですね。それで早稲田大学に行きました。文学部ではなくて、教育学部です。文学部の入試には、そのときは小論文があつたので受けてないんです。小論文なんて、もう全然やったこともないし、わからなかったんですね。その小論文を受けなかった人間が新聞記者をやっているとは、世の中、不思議なもんだなと思いますけれども、経済系とか、社会科学系にはあまり興味がなかったの

で、やはり人文系の歴史学でシルクロードがやれるのはどこかなといえ、文学部であり、教育学部であるということでしたので、そういう勉強をはじめたということでしょうかね。大学では、意外と勉強したほうだと思います。

古市 そうなんです。

中村 奨学金を取るためにとか、本当のところは(笑)。

古市 ご出身はもともと東京ですか。

中村 いえ、私、熊本なんです。熊本にいたのは高校生までですから、熊本出身といつていいのか、それからほとんど帰ってないもんですから。ただ実家はあります。

ただし、こういう仕事になりますと、あちこちに転勤が多くて、東京、大阪、福岡と、そういうところを行ったり来たりの生活ですので、

根なし草のようなものですね。

古市 シルクロードを専門に勉強されたということと、熊本での経験とは関係がありますか。
中村 あまりないですね。むしろ逆に、とにかく熊本から逃げ出したかったという、若者にあるがちなきっかけです。

古市 そのあたりのお気持ちはよくわかります。大学を卒業されてからも、勉強というか、研究を熱心になされていたということですか。

中村 そうですね。私は学部だけなんですけれども、どうしてもうちはマスコミ系が多い大学だったので、就職先として、マスコミというのは常に頭の中にありました。

どうせ人文系ですから、就職もあまりないだろうと思っていました。バブルが弾ける直前ぐらいだったと思うんですね。教育学部といつても教員養成系ではないので、ほとんど文学部と同じような形なんです。それでも就職に不安もありましたので、就職免許を取りました。就職免許は夜にずっと勉強して、かなり苦労して一生懸命単位を取りました。ちゃんとつぶしがきくように、免許だけは取っておこうということ。最後は熊本の出身高校で教育実習をしました。それから、それが終わって東京に帰ってくると、もう就職戦線は全部終わっていたんですね。



中村俊介さん

そのときは、しょうがないからということで、いくつかマスコミを受けて、それでもダメだったら大学院に行こうと思っていたんですが、マスコミには何とか引つかることができませんでした。マスコミものすごい倍率だった時代でしたので、まあよく何とかなったとは思いますがそれでも。

あと、やはりシルクロード。やはりそれがずっとありましてね、できればもう海外に行きたいというような気持ちがありまして、教育実習を終わって東京に帰ると、残っていたのがサント

リーとアラビア石油という会社だったんです。古市 なるほど。

中村 サントリーは、あの頃はメセナという文化活動にすごく力を入れていました。最終面接まで行つて、そこでメセナをしたいんだとかいうことを言ったような気がします。そうしたら相手の顔色がさあつと変わったのがわかりました。企業はやはり営業が大事ですから、メセナなんて、最初から横道にそれたようなことを言うやつはということだったんでしょう。

もう一つはアラビア石油。石油を本当に掘る、小売ではない日本の国策会社です。「アラビアのロレンス」じゃありませんけれども、アラ石だったらバグダッドとかカイロとか、中東に行けるかなと思います。いわゆるアラビアンナイトの世界とかに憧れていましたから、とにかく動機はすべて不純なんですけどね。

アラビア石油も最終面接ぐらいまで行つたと思うんですが、残念ながら落ちました。あのとき、一〇年後にサウジアラビアと日本政府との契

約が迫っていたんですけれども、あの頃の学生から見ると、一〇年後なんてもうずっと先のような話でして、入りさえすれば何とかなるんだろうと思っていました。結局、落っこちちゃったんですけれども、考えてみれば、その一〇年後にサウジアラビアとの契約がなくなつて、アラビア石油は消滅しましたから、人生万事塞翁が馬みたいなもんでして、何かそういう綱渡りというか、偶然というかの人生をたどってきています。

そこで、じゃあ、マスコミに入ろうと、しないよねとなりまして。マスコミの志望者が多いという大学の雰囲気の影響したのは間違いなのですが、もう一つ、大学のOBで朝日新聞にたしか轡田編集委員という方がおられたんですね。彼が早稲田大学に講演に来たことがあるんです。ちょうどNHKの「シルクロード」がヒットした後で、二匹目のドジョウを狙ったのかどうなのか、朝日新聞とテレビ朝日がシルクロードに調査隊を出したんです。昔はね、新聞社つてよくやつてたんですよ、そういうことを。もう今はほとんどないんですけどね。

轡田さんが、そのテレビ朝・朝日新聞共同調査隊のお話を大学でして、私はそれをたまたま、聞いていたんです。朝日新聞に入れば、そういう機会もあるかもねと。半分はそんな真面

目には考えてはいませんが、でも半分はひよつとしたらというところがあつて、とりあえずじゃあ朝日に行こうかなと思ひました。ほかにも受けたら落ちたりいろいろしているんですけどね、そういうこともあつて、新聞社へ入りました。

結局どうだったかなあ、そういう機会は特にありませんでしたけれども、今こういう感じでずつと三〇年やっていますので、こけの一念……という感じでして、好きなことをやらせてもらつて幸せな人生だな、記者人生だなと思っているんです。そういうにはまだ早いんですけど、もうちょつとどんな落とし穴があるか分かりませんが、三〇年やればもう十分という気持ちがありますね。

(二) 支局時代

市沢 朝日に入られて、最初の配属先も文化部だったんですか。

中村 違います。全国紙の場合は、全国の県庁所在地に支局がありました。今は総局といいますが、昔は支局とっていました。私の初任地は新潟支局です。

文化部は、昔は学芸部といっていたんですが、これはもう本社にしかありません。各県庁所在地の支局は、社会部とか地域報道部とか、そう

いうものの出先なんです。なので、文化部に關わる仕事はほとんどありません。基本的に事件記者といわれるような、いわゆるサツ、警察や行政を相手とする仕事です。あとは、うちの場合は高校野球とか、選挙とか、そんなところです。

当然、私も最初は三年以上、事件記者で、いわゆるサツ回りです。昔、「事件記者」というNHKのドラマがあつたそうですね——私は見たことはないんですが——、支局のタコ部屋みたいなところに住み込んで、パワハラを受けつつ、その中で修行するというのが昔の新聞記者だったんです。パワハラは普通なんですよ。今は絶対できないですが。そうした記者の最後の世代でした。

古市 上司にどやされながら記事を書くことを学んでいくというか。

中村 もう大変ですよ。殴られることもありますし、とにかく朝六時前に起きて取材して、夕方は原稿を書いて。夜は一時、二時までやりますので、ほとんど休みなんてありません。大概、皆さん、胃潰瘍になりますね。私も案の定そうになりましたが、それでどんどん辞めていくんです。それで残ったのが本社に上がつていつ、また専門部署に分かれていくということです。だから、辞める人も多いんですが、とにかくそうやって修行するんです。結局、抜いた抜か

れたの世界ですから。地方に行くと、大体、地元紙が圧倒的に強いんです。特ダネ競争では、そうですね、九敗一分けぐらいですね。勝つことはまずありません。勝つというのは、特ダネで地元紙を出し抜くということです。

皆、もう大学出たてで、少年探偵団みたいなのが警察を回るんですけども、相手が地元紙、新潟だったたら新潟日報というんですけども、その相手は、まず人数が違いますし、みんなベテランですし、大学の出たてなんて相手にもならないんです。こつちは縁もゆかりもないところに来てるんですが、相手は、たとえば自分の親戚が警察署長みたいな人がいるんですね。だから、勝てるわけがないんですよ。勝てないんだけれども、そこを泣きながらやるというのが修行になるということらしいですね。たしかに修行にはなりますね。鍛えられますよ。昔風の鍛えられ方をして、支局で耐え抜くわけです。

今は違いますよ、ひよつとしたら神戸大学にこの新聞社とかマスコミの奇特な希望者がいるかもしれません。これを見てやつぱりやめところということはちょつと困りますので(笑)。

古市 神戸大学の日本史研究室でも、数年に一人ぐらいかな、新聞記者になりたいという人がいますね。

中村 私のときは本当に百倍、二百倍の世界で

したが、それはやはり都市銀行が三行、一番
人気があったのが東京海上火災だったかな。商
社があつて、都市銀行があつて、マスコミ、そ
れから航空会社というのが大抵人気の職種でし
たね。今はまったく違いますけどね。

そうこうしている内に、西部本社に異動に
なつて、もう事件や、社会部だけは嫌だとなり
ました。

古市 新潟には何年おられたんですか。

中村 三年、四年近くだったかな。支局は大体
二つぐらい行くんですけども、私の場合は新潟
の次に、横浜支局に行くか、それとも西部本社
(福岡)の学芸部に欠員が一人あるから、どつ
ちに行くかと聞かれました。もともと熊本の出
身ですから、関門海峡を渡することに、基本的
には抵抗はない。本州の方は、意外とあの海峡を
渡ることに抵抗があるんですけど、私は全然
抵抗がなく、喜んで行きますと答えました。

(三) 学芸部(文化部)に配属

古市 それがそもその学芸部のキャリアのは
じめということですか。

中村 そうなりますね。横浜支局に行つたら、
また違う人生があつたかなと思いますね。

古市 支局を一つ経ただけで西部本社で専門的
な仕事を任されるのは、それなりに珍しいこと

だったんですか。

中村 それほどでもないですが、多いのは社会
部です。新人さんたちが本社に上がるときは、
大体社会部に配属されるんですけども、社会
部でさらにまれて、それから昔は外交部とか、
今の国際報道と言いますか、そういうところと
か、あるいはスポーツとか科学部とか、いろん
な部署がありますので、そういう専門部に行く
というのが多いですかね。

僕の場合は何とか欠員があつて、うまい具合
に学芸部に入り込んだという感じです。

古市 その学芸部の声がかかったのは、大学時
代のご専門に関わつてのことだったんでしょう
か。

中村 たまたまでしょうね。もちろん、文化関
係をやりたいんだということは、支局長に言つ
ていたので、それも関係してるかもしれませんが。
ただ、それって意外と賭けみたいなところがあり
まして、昔だと、社会部、経済部、それから政
治部、これらが一番偉いんですよ、会社では。
あとはもう相手にされないという感じですので、
文化部に行きたい、学芸部に行きたいと言つ
たら、支局長が社会部出身だったりすると、逆
に行かせていただけないとかね。

そのときはたまたまそんな意地悪な支局長
じゃなかったから、文化部に入り込めたわけで

すが、どこの世界でもそうですけれども、大体
基本的に自分の希望どおりの仕事ができるとか、
あるいは部署に入り込むということはあまりあ
りませんよね。九割近くは自分の希望に沿わな
いものなんじゃないですかね。よく分かりませ
んけど。

古市 そういう中ではかなり異例というか、中
村さんとしてはかなり希望に沿った選択だつ
たわけですね。

中村 ラッキーでしたね。

古市 西部本社に行つて、学芸部に配属されて、
そこから文化財報道との関わりが始まるという
ことなんでしょうか。

中村 そうですね。基本的にそうです。ただ新
潟のときも、木簡が出たりすると、私が担当し
ましたけれども。

古市 八幡林遺跡の木簡ですか。

中村 そうですね。あの頃、たまにそういう文
化財関係の発表があると、まったく無視するわ
けにもいきませんので、私が担当していました。
でも、それは本当に予備的な業務でして、文化
部、学芸部に入つたら、ほかに音楽とか美術
とかの記事も書くんです。あと、あの頃は学芸
部の中に、家庭面という暮らし関係の紙面もあ
りましたので、そつちも大分やりました。

だから何でもやるわけです。東京本社と西部

本社では、まず圧倒的に人数が違います。東京はけっこう細かく分かれてるんですよ。美術とか音楽とかに、三、四人ずつ担当者がいました。西部本社はそれに比べてたら人が少ないので、一人でいくつもいろんな仕事を担当しなくては行けないので、家庭面もやるし、美術とか音楽とか、何でも屋ですね、歴史関係以外で。でも、何でもできるというのが、結果的にはためになりました。

古市 なるほど。

中村 いろんな文化分野は、根つこのところはつながってるなということがよく分かってくるんですね、この年になりますと。

そういうことが分かると、記事の書き方、原稿の書き方も違ってきますし、自分で言うのも何ですけども、深みが出てきます。東京だと最初から細切れで、文学だったら文学しか、ずつとやってこなかったという人もいますが、それでは決まりきった形でしか書けない。広い視野が持てないんですね。西部という、何でももしくははいけないところで育った人間のようには書けないですね。

古市 とはいながら、家庭面だとか、音楽だとか、本当に多様なジャンルがあつて、それを二〇代の若さで記事にされていくというのは、なかなか大変なことだったんじゃないかと思う



司会 古市晃

んですけれども。

中村 そうですね。ただ新聞では森羅万象を扱うとはいいますが、やはり記事として扱うのは、読者の心が踊るかどうかが基準になります。是非はともかく、そうした点では、私や皆さんがやってきている文献史学は、文献の解釈のどうだこうだというようなものなので、はつきり言つてニュースにならないんですね。

それは専門雑誌でやってくれている世界です。それから、新聞のどこに一番の責任なり、対象があるかといったら、やはり読者なんです。一般読者。一般読者の関心、需要に応えるのが新聞、

マスコミですので、細かい専門的な文献上の話題よりも、たとえば発掘調査をして、地下からとんでもないものが見つかったとか、いわゆるニュース性が大事になってきます。ニュース性があるのはどうしても考古学なんですよね。

しかも文献史学だったら、訓練を積んで、古文書を読まなくては行けないとかですね、ある程度の技術が要るけれど、考古学は相手が物ですから——もちろん考古学でも技術は必要ですが——、文献史学の世界よりもとつきやすい。これは、私自身がそうだったから、おそらく一般の方々もそうだと思いますし、ほかに邪馬台国とか、いろいろとおもしろいものもありますし、そういう意味でニュース性がある。だから歴史学にとどまらず、ほかの多くの学問分野の中でも、考古学は新聞のかなり大きなウェイトを占めるんですね。

特に、あの頃はいろんな開発が多かったので、発掘調査も多くて、いろんな発見が相次いでいました。だから、考古はちよつと特別なんですよ。あともう一つは、考古学は社会に結びついていくということです。たとえば物理学がどうなっているところでも、関心はあまり持たれませんが、実生活の中ではあまり関係ない。もちろん機械工学とか、結びつくものもあるけれども、間接的で、直接ではない。

ところが、考古学の場合は、埋葬文化財包蔵地は調査を行うことが法律で決まっていますから、たとえば大きなビルを建てるときは、何か出てきたらちよつとまづいねとか、学問的な視点以外のね。だから、実生活にも関係しているということ。そして、そういう法律的な体制も絡むということです。

もう一つ、いつも思うのは、その嗜好性というか趣味性ですかね、趣味性と言ったらちよつと軽いんですけれども、一言で言えば夢とロマンです。さっき邪馬台国と言いましたけれども、何でこんなに関心を持たれるのかというほど、作家さんもそうだし、アマチュアの方々も非常に関心がある。その夢とロマンが、生涯学習とか、社会活動の中にもつながっていくと思うんです。

たとえば、物理学や数学といった基礎科学、法律とか経済学だと、実学と言えば実学ですけれども、これはちよつと一般の方々は近寄れないとなる。しかし、戦国時代のお城とか、司馬遼太郎の世界とか、あるいは古いところの世界となると関心がある。夢とロマンがある。

こういう学問分野は限られているんですね。文学とかもそうだと思うんです。

古市 考古学が持っている特別な魅力ということなんですけれども、新聞社の学芸部で扱う多

様なジャンルの中はかなり大きな部分を考古学が占めていたということになるんですね。

中村 歴史分野の中では考古学が一番大きいので、じゃあ自分自身の人生でできる限り磨いていこうという、一番中心のところに据えました。

古市 その転換は早かったんですか。

中村 やはり自分自身が中央アジア史、西域史をやっていたというのは大きかったですね。だから考古学も自分の分野というような、これは負けないぞというところの気持ちはありましたので、文化部へ行くんだったら、文学とか美術とか、まったく白紙の部分からはじめるよりも、ちよつとでもかじった歴史分野のほうがやはり武器になるだろうと、それはありました。

古市 そうなんです。私も大学では文献史を勉強して、最初に就職したところは大阪市文化財協会という財団で、考古学の世界に入ったんですけれども、文献史と考古学では似て非なるところもあって、溶け込めるところと溶け込めないところがあつて、かなり苦労しました。中村さんの場合は、そういうのはあまりなくて、すつと入っていったということですね。

中村 新聞社ですからね、基本的に教育委員会とかではなくて、まったく別のマスコミの世界です。それはなかったです。

たしかあれは明治大学だったか國學院大学

だったか、考古学研究室の飲み会にちよつと顔を出したりしてたんですけど、すごい縦社会で、これは入り込めないだろう、先輩が絶対だということな、考古つて意外とそういうところがあるらしいですね。そういうのは文献にはないですね。

結局、新聞社に入つて、歴史分野の担当になつていくんですけども、同じ担当が何人もいるわけじゃないんですよ。朝日新聞の場合は、何年か前までは東京に一人、大阪に一人、そして西部に一人という形です。一度その担当になつたら、その人がずつとやる。だから、新しい人たちが次から次へと入るわけではないんです。

文化部に来て、そして歴史をやりたいという後輩の記者たちはたくさんいたと思いますが、でも、結果的に、申し訳ないのですが、つぶす形になりました。

だからその責任もありますし、一人ですつとやっているとい一生懸命勉強しますし、キャリアを持つし、知識も増えるし、人脈もできます。わざわざゼロからの新しい人たちに変える必要はないです。からね。

だから、我々が世代交代するときに、また誰かを育てなくちゃならないかなという気はしますが、ただ取材自体がそういうやり方ではなくなつていくのですけれども、現実にはね。いわゆ

る専門記者は、これからはあまり必要とされなくなるでしょうから。

二 文化財担当記者として

(一) 吉野ヶ里・水中考古学

古市 話を戻しますけれども、西部本社に移られたのは何年でしたか。

中村 一九九四年です。

古市 その頃のお仕事で、特にこれが大きかったとか、埋蔵文化財行政の方でこういう方の影響が大きかったとか、そういうことはありますか。

中村 いろいろありますけれども、吉野ヶ里遺跡の調査が続いていました。吉野ヶ里遺跡が注目を浴びるのは、あれはNHKと朝日新聞の特ダネなんですけれども、一九八九年です。そのときは私はまだ学生で、三年生じゃなかったかなと思うんですけども、まだそれが尾を引いていました。

この間、吉野ヶ里遺跡がまた話題になっていきますね。私もだいぶ書きましたけれども、ああいう大きな発掘のときは、前線基地ができるんですよ。飯場と呼びますが、朝日新聞だったら朝日新聞の販売店のところにみんな拠点基地を置いて、電話を引いて、二四時間体制で張



吉野ヶ里

10年ぶりの吉野ヶ里遺跡の再調査。マスコミの熱気は1989年の吉野ヶ里ブームを再来を思わせた。(写真提供：中村俊介)

は」と言っていました。何かちょっと高揚するものがあって、空にはヘリが飛んでいますし、衆人環視の中で石棺の蓋を開けて、マスコミが脚立を並べて撮影していましたが、同じような状態が昔もあつたと思います。

それから、九四年、九五年になりますかね、佐賀県唐津市の久里双水古墳というのがありましてね。ここが未盗掘だったんですよ。この中にファイバースコープを入れて、やはりマスコミが見守る中、蓋を開けたんです。

あのときも委員会ができて、そうそうたる先生方が名を連ねて、もう大変な生中継の中で蓋開けたんですけどね、未盗掘は未盗掘ですけども、結局、出土したのは、盤竜鏡と、それから刀子が1つ、あと管玉。話が違うじゃない

りつくんです。ある意味、事件ですよ。よく先輩に言われたのは、考古学とか発掘記事も、事件取材、事件記事なんだということです。たしかにそうなんです。

とにかく何か特ダネがないかという、大変な騒ぎですね。今回、久しぶりに吉野ヶ里の調査がありました。かつて現場担当だった七田忠昭さんは「三〇何年ぶりだね、こういう感覚

かと。マスコミはもう大変で、蓋を開けたのがお昼でしたが、テレビ朝日なんて、夜の一〇時のニュースステーションまでずっと引っ張って、夜空の墳丘の上で、調査委員長の西谷正九州大学教授が、無理やりインタビューさせられていたのを覚えていますね。

古市 失敗が許されないような状況ですよ。ね。
中村 結局ほとんど何も出なかった。出ないこ

ともまた重要なんですけども、かなり印象深いできごとでした。

あと、九州で最初に放り込まれたのが、博多湾の水中調査でした。一九九四年、今でこそ海底遺跡というのが史跡になったり、文化庁がかなり力を入れてやったりしていますが、あの頃は何かもう宝探しに似たようなものでした。

ちょうど九州・沖縄水中考古学協会かな、そういうNPOみたいなのができてまして、それに福岡市が全面的にタイアップして、そこに朝日新聞が、西部本社発刊六〇周年だったかな、何かそういうアニバーサリーの年で協力することになって、博多湾の調査をしようということになりました。戦後、サベージで潜った人が、木造船に何かいっぱい器があつたという目撃談がありました。海外を行き来していた船が博多湾にたくさん沈んでいるのはたしかなんです、実際には砂地だからなかなか分らないんですよ、隠れてしまつて。しかし、そういう目撃があるということがちよつと話題になつていまして、じゃあ、それを探そうじゃないかとなつたわけです。

夏休み、一か月ぐらいずっとやりましたね。朝日新聞博多湾海底取材班なんて名前をつけましたが、うちの写真部でスキューバの免許を持つてるカメラマンが三人と、担当記者は、結

局私一人でした。海に潜るのはかなり過酷な労働で、時間が決まっています。私は潜れませんから、もう船の上で寝てるか酔ってるか、とにかく待つわけです。大体漁船をチャーターするんですが、灼熱地獄ですよ。影があるところにはモニターみたいな機器を入れて、あとは太陽光にさらされて日干しになるような過酷な現場でした。結局、何も出ませんでしたけれども、



鷹島

リアルタイムで引き揚げられる長崎県松浦市・鷹島沖の元寇船の木製いかり。(写真提供：中村俊介)

やはり楽しかったですね。はじめての水中調査でしたから。

それ以来ずっと、日本の水中考古学の発展の歴史を、ずっと見ているんです。二〇一二年に日本の海底遺跡ではじめて国の史跡になった、長崎県鷹島の神崎遺跡というのがありますが、それは一三世紀に、元寇の、よく知られている弘安の役で、四四〇〇隻の元の船が集結して、いわゆる神風で全滅するわけですが、その船や遺物がみつかったっているんです。

鷹島の元寇の海底遺跡は、江上波夫さんが全部の科研の代表で、水中考古学の茂在寅男さんが中心となつて、一九八〇年からずっと調査が続いてはいたんです。それが、今はたしか国宝になつている蒙古襲来絵詞でみんな見たことがある、馬の上でバーンと破裂してる「てつほう」と言われるものが本当に出てきた。今は大事そうに展示されていますけども、出てきたばかりのときには、まだそのコンテナの中で無造作に置かれていました。

(二) 特ダネの探し方

古市 吉野ヶ里は大規模な工業団地の

関連調査だったと思いますが、非常にスケールの大きい開発でした。博多湾のように、発掘調査に行政だけでなくマスコミが出資をするとか、本当にそのバブルと言いますか、大規模な開発が相次ぐ中で、世の中も景気がいいし、調査もどんどん進んでいく。一方ではもちろん、貴重な遺跡が破壊されていつたりしてるわけですけども、陳腐な言い方ですが、隔世の感がありますね。私は一九九六年に行政の調査機関に就職したんですけども、そうした大規模な開発はもう大体終わっていて、先細りが見え始めてきた頃でした。埋蔵文化財調査の、言ってみれば華やかな時代を見てこられた中村さんからすれば、このあたりの変わり方はどのようにお考えでしょうか。

中村 そうですね、まず、私が就職する前の時代は、たとえば遺跡を守るキャンペーンに、マスコミがかなり絡んでいた時代だったんですが、なかなかそれからステークホルダーがどんどん多くなって、そう簡単にいいとか悪いとかが言えなくなり、キャンペーンでなくなつたという事情があります。

ただ一番変わったのは、やはり人ですかね。私が入った頃は、埋蔵文化財行政の、いわゆる第一世代という人たちがまだまだ活躍していた時代でした。第一世代の人は行政マンであ

り、かつ研究者であり、だから遺跡を守るとか、気概に富んでいた人が結構たくさんいたんです。でも一方で、意外といい加減なところもあったりして、酒を酌み交わして、遺跡を守ってやるとかね、そんな議論をしていました。そうした時代から見れば、これはよく言われることなんでしょうけども、今は本当にサラリーマン化してるなという気がします。今、気概を持った人がいないとはもちろん、言いませんけれども。つまり第一世代がリタイアしている。

たとえばこういうエピソードがあります。九四年だったかな、福岡市のベテランの方が——もういいでしょう、亡くなられましたんでね——発掘していたわけなんですけれど、とにかくその方とお酒を飲んで、その人、お酒が好きでしたから、実はあそこの遺跡でこんな鏡が出てるんですよみたいなことを聞き出したんです。

古市 まだ報道前ですか。

中村 もちろんそうです。あの頃はまだ文化財が特ダネになる時代だったんですね。特ダネになれば、大きくなる。この時は、いろんな鏡が出ていと言ふことを聞き出して、翌日すぐに現場に行きました。

で、こちらはやはり発表するよりも前に書かせてほしい、発表になったら基本的に各社みんな

な横並びですよ。ところが特ダネだと、記事の扱いが2段階、3段階よりでかいんです。具体的に言えば、普通の埋文記事がもし社会面、第二社会面の三番手ぐらいだとしましょう。鏡が出ましたよと、どこも読売も毎日も、どこも、テレビも等しくやる。ところが特ダネになると、その学問的なその価値なんかよりも、それ以上に、「箔がつく」というんですけれども、これは特ダネだから大きく扱うということになるんです。

そのときは普通の発表だったら大体、第二社会面ぐらいに載るものが、一面の肩と言いますが、二番手の扱いになりました。つまり特ダネになると、ニュースの扱いがよくなるんです。そりゃそうですよね、ほかは書いてないわけですから。他のみんなも慌てて追っかける。その記事も一面の肩、脇のほうです、二番手で。

新聞は、紙面右上の一番大きいところを頭と言います。そして、二番手はその横のちよつと長細い感じで肩つて言います。三番手は腹と言います。一面だったなら、その下に天声人語があるという形なんですけど、とにかくいい扱いです。

ただし、その特ダネで先に書かせてもらうには、これは大事なところで、古い言い方をすると、我々は仁義を切るというんです。誰にも迷



惑をかけないようにちゃんと根回しをして、そして手続きを踏んで報道させていただくんです。こちらの特ダネなので、先に書きますよ、その代わり、福岡市の課長にちゃんと書かせいただきます。その後にご迷惑をおかけすると思います、ほかのマスコミが、何で朝日ばかりという苦情言ってくると思いますけれども、どうぞお許しくださいと。

そうすると、そこは第一世代で、まあこれしょうがないよねと、これはあなたたちの仕事だから

ら分かった分かったという、そのぐらいの太っ腹なんですよ、第一世代というのは。

ところで、その特ダネはどうやって取ったのかって聞かれますよね。これにはさすがに、私たちマスコミには情報秘匿の守秘義務があります。酒を飲ませて、誰々から教えてもらったとは口が裂けても言えないんです。それで、「いや、実は、昨日、道を通りかかりました。そして横目で見てみると、キラリと光るものがありました」なんて、もうウソをしゃあしやあとと言います。

向こうもそんなことは全部ウソだと分かっているんですね。「そうか、じゃあ、それならしょうがないね」と、お互いにこう、そういう何か阿吽の呼吸とでも言いましょうかね、そういうことにしておきましょうというやり取り、これが結構おもしろいんですよ。そういう第一世代が少なくなつたというのが、個人的な印象です。

古市 そういう世代から言うところ、今は第二世代どころか第三世代ぐらいになりますね。そういう意味では、報道に関わっている方も世代交代をされているわけですよ

ね。

中村 うちの場合は、まだ私が第一世代じゃないですけどね、もうちょつとですね。

(三) 取材の変化

古市 これは私の経験ですけども、昔、学生の頃に発掘調査に参加させてもらっていると、その現場に足しげく通ってこられる記者の方がおられて、リーダーの先生に話しても相手にしてもらえないものだから、我々のところにやってきて、何が出てくるんですかと聞いてくるような方もいました。もちろんそんなことは言えないんで、黙っているわけですけども、何かそういう現場主義の世界がまだありました。それが就職した頃には、調査でも大きな発見があるとなると、こつちもサラリーマンですから、記者発表ってやりますよね。それまではもちろんちゃんと箝口令を敷いて、何も言わないし見せないし。記者の方もそれをちゃんと心得ておられて、記者発表になるといろいろ質問するといふ、今も続く形ができていました。私の印象では、記者の側も最初の世代の方とはずいぶん違っていて、もらった情報で記事にするといふか、一種の受け手の気分を感じます。

中村さんご自身も、ご著書の中でそういうことをお書きになっていたと思うんですけども、

そのあたりのその報道の側の変化というのをどのようにお考えでしょうか。

中村 やはり今おっしゃったように、昔はとにかく現場に記者が来ていたましたよね。考古学報道は事件だというような言い方を散々されて育った世代ですから、やはり現場に行くんです。見つかったら特ダネになるという、本当に事件と一緒に。昔の人たちは発掘というものがニュースのネタになるということがよく分かっていました。私ができたかどうかとはともかくとしてですね。

行政の方からは、昔はよく来てたけど、今は電話一本で済ませようとする、本当に簡単だねとよく言われます。そのあたりの記者の資質が変わってきたのもたしかです。

発掘などの第一報に触れるのは文化部ではなくて、支局とか、あるいは社会部とかの記者です。そういう人たちは新人さんも多いですし、歴史とか全然、考古学のこの字も知らない人たちが多いです。だからしょうがないんですけれども、埋蔵文化財行政の側も、今はそういう人たちでも、もうとにかく横書きを縦書きにすれば、何でも書けるよというような、5W1Hがその発表のプレスリリースの中に全部書いてある、これをそのまま移せば記事になるというぐらい、よく言えば丁寧に、悪く言えば、過保護

なぐらいの発表をするんですね。

我々受け手のほうも、横を縦にすればいいだけの話だから、何の努力もしない。結局お互いが負のスパイラルみたいな感じで、そうなる、当然特ダネ競争もなくなりますし、記者も勉強しませんがね。それが一番マスコミ側も、行政側も変わってきているところだと思います。

もう一つは、記者会見がないですね。昔はしょっちゅうありましたが、今は激減しています。もちろん開発のための発掘調査が多かった時代だということもありますけれども、まず会見がないと。どのくらいのレベルのものが見つかったら記者会見をするとか、そういう基準はないんですよ、標準化されてないんですね。文化庁もそういうことに対しての通知を出したことはありませんので、これは行政側の、あるいは首長の裁量によって決まるんです。昔は第一世代がいて、ぜひともこういう物が見つかったから知ってもらいたい、これは文化財という国民全部の共有財産だから知ってほしいということで、どんどん記者会見していたけれど、社会が複雑化して、ステークホルダーがこれだけ多くなってくると、重要な発見があったら、当然それは開発の日程にも響くし、下手をして保存するというになると、開発側にとつてはいいことはありませんからね。

行政も、そのあたりの顔色をうかがってと言つては悪いですが、やはり付度してしまふ。だったら大事な発見はあるけれど、とりあえず記者会見はいいやというふうになりますよね。

行政側もサラリーマン化していくと、調査成果の分析はできたから、会見については及び腰となります。いつも思うことですが、そうすると、文化財という国民共有のものを知る権利は侵されているんじゃないでしょうか。それは何とかしないといけないのではないかと。どの程度の発見があれば会見が必要なのかについての、ある程度標準化が必要なんじゃないのかと思います。

古市 昔の記憶で言うと、もう一つ、いわゆる投げ込みというのがあって、記者会見はしないけれども報道陣に向けて公開はする、ただし説明は特にしないというやり方があったかと思いますが、そういうことです。

中村 投げ込みも、やるかやらないかは、特に決まってるわけではありません。投げ込みをしてくれるならまだいい方です。会見はなくても、こんなものが見つかったよと、記者クラブとかに平等に投げ込まれると、知識がある記者は、これは大事な話じゃないか、すごいニュースじゃないかとなって、あれこれ調べ出す。そ

ういゝのは勉強している記者しかできないこと
ですよね。そして、それが特ダネになる。しかし、
そういう投げ込みさえなくなると、もうさすが
に書けないということになります。発掘現場を
すべて巡るというのも、現実的には無理ですの
で、結局、それがどういう形で情報発信される
かというのは、十中八九は行政側——大学など
の学術調査は1%として——、九九%の行政側
に生殺与奪権は握られているという感じじゃな
いでしょうか。だから今、埋蔵文化財が国民共
有の財産というのは建前であつて、多くの成果
がどんどん闇に葬られていつているという現実
があると思います。

この間、埋蔵文化財保護法の改正がありまし
たけれども、すでにこれまで地方教育行政法の
見直しを通して教育委員会が持っていた権限が
どんどん首長のところに移つていつていますか
ら、埋蔵文化財保護法の改正で、ますますその
傾向が強くなるかもしれません。学会でもそれ
が一番懸案事項だそうですね。

(四) 市民の反応の変化

古市 たしかに最近、埋蔵文化財関係の記事が
減っているし、その公開も、いわゆる現地説明
会もなくて、報道されたときにはもう埋まつて
いるとか、そもそも公開の予定がないというの

も増えているなというのが実感としてあつたん
ですけれども、そのあたりの実情についてお伺
いできたと思います。

もう一つの問題として、かつてはたとえば保
存か破壊かというような、分かりやすい対立関
係があつて、市民の立場もその関係の中で理解
できるところがあつたと思うんですけども、
先ほどからステークホルダーの多様化というこ
とをおつしやつていて、市民自体が多様化して
いて、いろんな立場でいろんな意見を言つてい
ると思うんですね。

その点で言うと、今日のお話で勉強になつた
のは、新聞記事というものは、事件を報道する
という、ニュース性が基準になつているという
ことです。そうすると、そのニュースを受けた
市民の側の反応が、この間、どう変わつてきた
のか、そのあたりはどういうふうにお感じて
しょうか。

中村 これはもう本当、市民の感じ方だから、
私にはなかなか分からない、立場的にも分か
らないですけど、ただ、埋蔵文化財とか歴史遺
産に関する知識や認識は、昔と比べると格段に
大きくなつてゐるんじゃないでしょうか。たし
かに、文化財の記事は少なくなつてはいますけ
れど、これは蓄積ですからね。たとえば東日本
大震災のときや、神戸のときもそうだったん

じゃないでしょうか。かなり荒廃した後に復興
が始まるときに、法律にしたがえば、ちよつと
しか調査できない。それが復興を遅らせている
ということはよく言われましたけれども、でも
結局、結果的に自分のところの歴史とか地域史
とか、目には見えないけれども、それが地域の
アイデンティティーになつていて、そういうレ
ゾナードトルの大切さ、こういう土地の記憶と
いうものがあるから、復興にも力を与えてくれ
るんだよねというような認識は、非常に今、受
け入れられると思うんですね。

それだけ地域の歴史というものが、どんなに
自分たちにとつて大事なんだということについ
て、意識が高まつてゐると受け取つていいと思
いますよ。まだまだ地域的な差はあると思いま
すが、全体的にはどんどん高まつてゐるんじや
ないでしょうかね。

たとえば昔、ご存じだとは思いますが、大宰
府が、あれが史跡の指定範囲が拡大になるとき
に、周りの住民からは反対運動がありました。
普通、史跡を守れというキャンペーンは分か
りやすいんですけども、そればかりではなかつ
たんです。遺跡はもう必要ない、それよりも開
発をというようなながれです。高度成長期は、
そういう時代でしたよね。

つまり、史跡なんか、野原のままにして守ら

せると、うちの地域はどんどん開発に遅れてしまつて、波に乗れないというような危機感があつたわけです。今からすれば驚きますけれども、当時としては一般的だったんです。その地域の記憶とか、あるいは歴史の大事さとか、そういうものが、高度成長の中で見えなくなつていた時代だったと思うんですね。

そういう時代から比べれば、遺跡を守るという立場が大前提でやれているという時代であるということは、この半世紀ぐらいの間で、一般の人たちの認識が格段に変わってきているというふうに思つていいんじゃないでしょうか。

そのためには、私たちはやはり、報道の義務というか役割が何なのか、そこを問い返すべきだと思います。我々マスコミは、特ダネを求めたりして、一喜一憂したりしているわけなんですけれども、もつと俯瞰して見ると、なぜ発掘報道というのがあるのか、それを一言で言えば、こういう大事なものがある、地域の歴史というのはこんなに大事なんだ、それは地下から現れる発見に、具現化されているものなんだということとを伝えるということだと思ふんですね。だから、地元の歴史とか地域史とかを大事にしましょうよ。それが私たちの生きるすがたということを認識してもらおう。それを高めてもらうためのツールが、発掘報道だと思ふんですね。

発掘報道を通じて、読んでくれる人々が、うちのところもこんな歴史があるんだねということを知ってくれたら、それが一番うれしいことだし、そのための発掘報道だと思います。

三 報道の役割

(一) 文化部の仕事

古市 なるほど。非常に興味深いのですけれども、ここまで私ばかりお伺いしてきたんですが、皆様方、いかがでしょうか。もし何かあれば、新しい話に展開していただくのもいいと思います。

市沢 先ほど、発掘報道の記者の第一世代は、中村さんご自身じゃないかとおっしゃいましたけれど、ずいぶん若い頃に先輩から新潟支局でしごかれたというお話もありましたが、中村さんが先輩記者から教わったことで、今でも引き継がれていることはあるんでしょうか。

中村 今、私、第一世代と言いましたけど、第二世代ぐらいかもしれないですね。というのは、発掘報道も取材も事件であるという教えが、私の中に引き継がれているからです。次の世代にはおそろくないと思います。

発掘報道が、遺跡とかそういうものが、どのくらい新聞ネタになるかと分かつてきたの

は、大体、飛鳥の高松塚古墳の報道ですね。一九七二年でした。あの壁画が見つかった、高松塚からです。それまでもちよこちよことはもちろんありますけれども。

高松塚のときは、マスコミで実は対応が分かれてまして、朝日新聞は、意外と成功した方なんです。あの頃、普通、新聞でカラー写真なんてなかったんですが、それをばーんとカラーで出したんですよ。あれはかなり特ダネ的に行けたと思うんですけども、ドーンと出したんですよ。ところが、ちやうどそのとき、ある通信社では、ちやうど高松塚と同じ地域の橿原市長選挙の直前だったのかな、それで、発掘？、何やそんなもん、選挙が大事や、みたいな感じになつて、ほとんど選挙報道になつてたらしい。これの特ダネの反対で特オチと言います。

古墳なんて何だかよく分かんないけれども、市長選よりも大変なことだったのかとなつて、その通信社では、それから橿原支局を作つたと聞いています。つまり、文化財報道をめぐつては、そのくらい対応が割れてたんですね。

そのときは、文化部でそういう専門記者はいませんので、全部社会部が担当したんですよ。あの頃は高橋徹、天野幸弘というベテラン記者がいたりして、彼らが第一世代ですね。基本的には社会部の記者です。その後で、歴史関係も



かりませんけれど。

市沢 事件として扱う共通の基盤を持っていたというのは、すごくよく分かりますね。

中村 基本的な、こんなものが発見されましたよという5W1Hは、社会部でも書けます。一番そぎ落とされた記事ですね。社会面の記事というのは、いかにして簡潔にシンプルにして、簡単に分かりやすく読者に伝えるかというのが第一目標ですの

で、一番シンプルな、一番効率的な形にしているんですね。つまりそぎ落とす作業なんですよね。余計な情報はどんどんそぎ落として、骨だけにします。これだけで大体分かるというような作業、そういう作業なんです。

それが一体どういう事件であるのか、解説や歴史的背景とか、それがどういう意味があることなのかは、基本的に文化部がやります。それはかなり長い、百行を超えるような記事でもあるので、そこには独自の視点とか、どう思わせるかとかですね、つまり、その記者の力量によって全然変わってくるんですね、文化部の記事というのは。

一つの骨にいろんな視点とか、歴史的背景と

か、そういうものをどんどん肉づけしていく作業なんです。肉づけするということは、記者の個性が出ますし、記者の見識が出る、視点が

出る、切り口が出る。センスが出るというんですね、書き手によって全然違うものになる。こうしたところに重要性を感じない人は書かないし、いやこれはこういう視点からすると、とても重要な話になる、記事になるという人が書くんです。それは記者によってだいぶ違う。だからこそ署名記事なんです。必死になつて笑われない記事を書くために、文化部の記者は勉強して、キャリアを積んでいくわけです。今の記事は何でもかんでも署名がつきますけどね、昔は、名前を書くということは、そのぐらいの重みがあったんですね。

(二) 報道のスタンス

市沢 あと一つだけ、少し先走ってしまうようなことになるかもしれないけれど、肉づけしていくのが文化部の仕事だというのは、そのとおりなんだろうなと思うんですが、その部分がどういうものであるのかということがすごく気になるんです。というのは、尾関章さんという朝日の科学記者の方が、二〇一三年に『科学をいまどう語るか』という本を書かれているんですが(岩波現代全書)、本の副題が「啓蒙から批

「評へ」となっていて、要するに自分が書いた記事というのは啓蒙としてはよかつたかもしれないけれど、批評的観点はどうだったんだろうという形で問題提起をしておられて、自分のキャリアをこうした形で振り返っておられるんだなというのを感じたからなんです。

尾関さんがこの本を書かれたのは、福島のある原発事故があつてのことで、自分たちは科学技術を分かりやすく伝えることについてはきわめて熱心であつたが、それを批評的に捉えるという観点からすれば、それはどうだったのかということを、痛恨の思いを込めて書かれていきます。今回、中村さんが書かれた文章を読んでいると、パブリック考古学の中で、やはり批評的なところが弱いという点を、いろんな方が指摘しているんですね。そういうことを中村さんご自身も認識されているんだなと思つて拝読したんですが、啓蒙や批評といった言葉が適切かどうかは分かりませんが、そういった観点から見たときに、肉づけしていく作業とは、どのようなものか、あるいは今後どのようなものであるべきと中村さんは考えておられるのか、お伺いできればと思います。

中村 そうですね、さつき地域史って重要だよねということを知ってもらおうと言いましたが、これもある意味、偉そうな言い方ですけど

れども、啓蒙ということですよ。それはあると思う。ただ私自身はあまりしないタイプです。もちろん、する人もいます。たとえば私が東京にいたときに、読売にライバルがいたんですけれど、彼は学界に対しても批判的な記事を書いていました。要するに、反権力というか。新聞、ジャーナリズムというのは、まず批判精神がないといけないという視点でやっていた人ですから、それを非常に重要視していました。そういうところは、ジャーナリズムの中では確かに重要だとは思いますが。

自分自身について言うと、二〇〇〇年の旧石器遺跡捏造事件のときは、さすがに自分自身を振り返りました。忘れもしない十一月五日でした。東日本で起こった事件ですけども、あのときは西部本社にいたので、管内は東京だから大変だなと、どうするのかなと思っていました。

そしたら、すぐに応援に行けと言われてまして、福岡から東京に飛びました。応援と言っても、あれは圧倒的に毎日新聞が次から次へと特ダネを繰り出してくるので、これはもう追いつかないです。要するに応援というよりは尻拭い部隊でした。

岩手や仙台、それから秩父まで、一週間ぐらいずっと出かけて、えらい目に遭つたんですけ

ども、結局、捏造した人と学界の、持たれ合いの氣質があつたと言われますね。発見する人に、学界自体が寄りかかつてしまったというような。もう一つは、捏造を許した東北のNPO団体は、何の検証も経ず、マスコミを使つたんですよ。つまりマスコミでオーソライズさせた。普通だったら、これが本当に石器なのか、ただの石ころなのか、旧石器を見分けるのは一番難しいところなんですよ。学界でのコンセンサスも得るというような手続はまったくせずに、マスコミを呼んで、こんなものが見つかりました、三〇万年前のもんだということで、どんどん出していった。

学会でも分かんないのに、マスコミなんてそれを判断する能力がないから、言われるがままに垂れ流した。結局それが捏造だったわけ、マスコミもすぐ罪があるんです。だからこそ、文化部が可能な限り勉強しなくちゃいけないというの、そういうこともあるんです。

そういう反省もあるんですけども、それよりも何よりも、どんどん記者会見を開いて、その捏造の情報を批評することもなしに、市民に垂れ流していったというマスコミの罪というか、同じ問題は学会にもあつたんですけれども、ジャーナリズムって一体何なのかっていうことを思い知ることになりましたね。

後日談もあります。捏造問題が九州の方に飛び火して、週刊誌に第二の神の手と名指しされた方が自殺するという事件が起こりまして、いろいろと派生していくんです。批評とはちよつと違うんですけども、批判的に見る、物事をジャーナリズム的に見るには、それなりの知識とキャリアとセンスを総動員していかなくてはいけません。これは文化報道でも同じことで、そういう意味ではとても大事だと思うのです。

市沢 尾関さんの本の中で、あることが発見・発明されて、これはがん治療に朗報であるとか、何に役立つかどうか、自分もそういうことをさんざん書いてきたけど、本当にそれが実用化されたのを見たことはほとんどないんだというようなことを書かれています。そのあたりは、文系的に翻訳すれば夢とロマンかもしれませんが、記事はインパクトがあるものにといいことになっていくんでしょうか。

さつき（紙面の）肩を取るという話をされましたが、市民にどう見せるかということに深く関わっていると思うんですけど、ジャーナリズムのなかでの力学が、尾関さんの本を読んでいる、すごく気になってしまいました。これと同じような本質があるんだろうかというのを、ぜひお聞きしたいなと思います。

中村 新聞記事は恣意的なものだと思います。

どんなに客観的で公平な報道を目指すといっても、そんなことはあり得ません。結局、記事を書くということは、やはりほかを出し抜きたいとかね。私たちが記者である限り、自分の記事を大きく扱ってもらいたい、そういう心理は必ずあるし、発掘側にしても、やっぱりこういう調査成果を出したつていうことを知ってもらいたいという気持ちがありますよね。その最たるものが、さつきの旧石器捏造事件だったんですけれども、必ず我々書き手の中でも、恣意的にやる。批判的に考えると、ストイックに考えれば考えるほど、記事は小さくなっていくわけです。それから、それはありません。

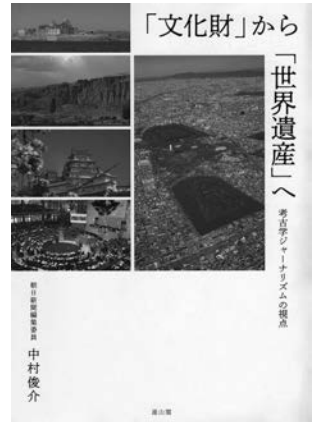
ただ逆に言えば、そこにどれだけストップをかけて、自分の中で、このぐらいの価値なんだと、大きくしたいのは山々なんだけれど、一般的にベタ記事しかないよねと、そういうふうにちゃんと自分自身を抑えられるかっていうかな、それも大事でして、それはある意味、自分自身を批評するつていうことになるのかもしれないですね。実際にはなかなかできないんですけども、難しいですね、永遠の課題ですね。

（二）地域の歴史の伝え方

古市 話題が戻ってしまいますが、報道の役割としての地域の記憶というお話がありました。

これすごく重要だと思うんですが、一九九〇年代から二〇二〇年代にかけての変化が、どうしても気になります。文化財保護法が大きく改定されたつていうことがあって、さつきおっしゃられたように、教育委員会の所管から首長部局に移っていくという大きな流れがありますよね。その眼目の一つは、多分、文化財の観光資源化というか、悪い言い方をすれば消費財化とも言えるし、もちろん逆のポジティブな言い方もできると思いますけれども。吉野ヶ里遺跡での、この前の石棺を開けるという調査が公開されて、何かもう開封の儀のように報道されていました。あれは多分、佐賀県の観光戦略の中に入つてやつている話だと思っっているんですが、文化財を巡る状況がこの間、大きく変わって、法がそれを支える形になっていっているのではないかと思います。

そうすると、たとえば戦前だと、これもご著書の中でお書きになっていた郷土史のお話なんかがあつて、その郷土史をフォローしていく皇国史観があつて、郷土史の側もそれに乗っついていくような動きがあつたと思うんですが、神武東征の行幸比定地探しみたいなことをやっているわけです。戦後になると邪馬台国が出てきて、それが郷土史の自覚を促したところもあるとは思いますが、地域の中で歴史を考



中村俊介『「文化財」から「世界遺産」へ』（雄山閣）

えるというところでの行政のあり方とか、あるいは報道のあり方をどうお考えか、もう少しお聞かせいただければと思います。

中村 本場にいろんな視点があつて、一口ではなかなか難しいですけど、私も新聞というところにいると、戦前戦中は、歴史の一つの捉え方にも、非常に制約があつたわけです。戦後は、それが解き放たれて、いろんな形で地域史が出てきた。邪馬台国の問題もその一つですね。地域の歴史、これはとてもいいことだと思います、基本的には。

それに、うまくマスコミの動きがかみ合ったということもあります。なぜかみ合ったかという、戦前に施行された新聞統制令というのがあります、それまではあちこちに小さい新聞社がたくさんあつたんですけれども、大体一県一紙の形になったわけです。多少の例外がありますが、基本的に一県一紙です。かつては、新

聞は地域の言論機関として、かなり重きを置かれていたので、その地域の新聞が、戦後になって地域の歴史を高揚させるような報道をして、いろんな形で啓蒙していくというような図式が出てきます。これは基本的にはとてもいいことですよね。

ところがそうになると、逆に負の部分が出てきます。行きすぎると、排他的な部分が必ず出てくるわけですね。周りと比べて、うちはすごいんだと自慢してしまう傾向がエスカレートしていきます。その最たるものが、邪馬台国論争なんですよね。

私自身は、邪馬台国がどこにあつたかには、あまり興味はありません。でも邪馬台国論争には興味があります。なぜいろんな形で、たくさん邪馬台国が出てくるんだろうと。戦前だと、少なくとも、知識層は限られていましたから、多分あり得ない話だと思います。戦後になって、言論が自由になって、アマチュアも参戦する。作家松本清張、宮崎康平、いろんな方々がそれをネタに発言する。これはある意味での歴史学や、考古学の解放ですよ。だからこそ、地域史が多様な形で興隆してきているといえると思います。

しかし、行き過ぎると排他的になるわけですね。歴史には、相対的な見方が必ず必要で、そ

のことで初めて自分の位置づけというか、正体が分かってくるということです。そういう意味では、全国紙は複数の地域を広くカバーしていますから、レタティブな見方ができるんです。私が全国紙にいることで助かっているのは、この点です。

地域史が高まることで出てくる弊害みたいなものを、全国的な中での位置づけが分かるような材料を提供できるのが、我々全国紙の記者かなと思つています。

古市 古代史の比較的古いところをやっているものですから、市民の方から邪馬台国について意見を求められたりすることもあるんですけども、そういうときには、所在地に関連する話題が圧倒的に多いんですね。同じ倭人伝を読むにしても、たとえば、倭人伝から読み取れる倭の社会のあり方と言いますか、さまざまな習俗だとか、社会を成り立たせている交通とか階層のあり方とか、そんなところがおもしろいものなと思うんですけれども。俯瞰的な見方というかね。

中村 両方必要だと思うんですよ。俯瞰的な視点と、地域から中央を見る視点と、その両方の視点があつてはじめて見えてくると思います。どっちか一つというのは、ちよつとどうかなと思いますね。

古市

西部本社との関係で言いますと、伊都国を熱心に研究された原田大六さんがおられて、原田さんの調査で、伊都国の実態が考古学的にわかってきたというのは、すごく大きいですよ。一方で、その成果を文献史学に結びつけるところでは、ローカリズムと言いましょか、かなり過度に出た部分があつて、そこが原田さんのお仕事の評価が難しくなってくる部分だと思ふんですけれども、そのあたりをどう考えるかというところかなと思います。

中村

原田さんの場合は、どうしても反アカデミズムというか、ルサンチマン的なマインドがあつて、やっぱり歪んでるんですよ。だから、郷土史のやりすぎになると、そういうことになるというのは、原田さんが一番分かりやすいですよ。そうした反アカデミズムは、地元では英雄みたいに祭り上げられて、言い方はよくないですが、ある種の神のような存在になったりして、そうなると見えるものも見えなくなってしまう面があつたのかなと思います。もちろん、すごい仕事をされた方なわけなんですけれども。

古市

博物館（伊都国歴史博物館）に行くと、原田さんの銅像が建ってますでしょう。銅像にまでなる考古学者ってなかなかないですよ。

中村

あそこでは、悪くは言えないですよ。

古市

以前だと、中央と地方の対立構造があつ

て、全国的な歴史と郷土史とか、

全国紙と地方紙みたいな対立もあつたし、学歴を持つてる人と持つてない人みたいな、そういうのもあつたし、地域を見るといつも、その位置づけが難しかったと思うんですね。今、これは私たちという言い方が正しいかどうかはわかりませんが、神戸大学は地方国立大学で、一応官と言えば官みたいな立場です。その研究者たちが、市民とどうやって連携しながら地域史をどう考えていくかということとか、地域が持つていく資料をどうやってそのまま残していくかとか、そんなところが始まって、地域の歴史を掘り起こすみたいなことを、組織としていろいろやってるんですけれども、そういうところを、これからどう進めていくか、そのあたりについてお考えを伺いたいんですが。

中村

知り合いで、高校の先生なんですけれども、いろんな大学の人たちと連携しながら、地域から見る世界史というようなことを



やつておられます。地域だけしか見ないということは、すごく閉鎖的になりますよね。地域の中から外の世界を見るという視点は、相対的な話で、また違うところがぎつと見えてくると思うんですね。

だから、具体的にどう言う立場ではないんですけども、神戸の町から地域史を勉強される方、そういう視点があるとするならば、もつと広いとか、海外とか、そちらにその視野を広げていかないといけないと思います。そうなったときにはじめて自分自身の本当の位置づけが分かりますから。神戸なんて外に開かれた歴史を持つているところですから、うらやましいなと思いますよね。

(四) 世界遺産・日本遺産・地域の遺産

古市 この間、取り組んでおられる世界遺産の問題があるんですけども、文化財の意義づけを極度に単純化してしまうと、一つの反作用と言いますか、その文化遺産の格付につながるようなところがあつて、当初の目的はそうでなかったかもしれないけれども、そういうところに先ほどの文化財保護法の改正なんかも、多分絡んでくると思うんです。また別に日本遺産みたいなものもあつて、文化財同士の相互の関連性というか、それを何かストーリーを作るみた

いな話がありますよね。

これも見方によっては非常に恣意的な意義づけだと思うんですけども、一方でその地域の中で人々が持っている有形無形の歴史には、唯一無二というか、比較できる部分とできない部分があると思うんですよ。それを無理に格付するような動きがあるように見えてしまうんですけれども、それをこれからどう考えていったらいいの。

中村 そうですよ。今の両者つて、本当に相矛盾するというか、相対するというか、やはり非常に難しいと思いますが、世界遺産も含めて言えば、ランキングというのは、簡単に言えば、もう世界遺産がトップになっていて、そしてどれぐらい文化財があつてというような、市町村の、あるいは都道府県の姿勢があります。

文化財に対してランクづけなんてない、価値の大小はないという見方がありますが、これある意味あたっているし、ある意味間違っているわけです。文化財保護体制や行政の側からいえば、施策的にはランキングがあつても仕方ないということになります。

しかし、個人個人や地域にとつてはどうか。村の鎮守さんだつて、姫路城よりも大事だという、それもまた一つの価値づけですから、これはそれぞれ恐らく無数にある。そういう意

味では価値づけがないというのは正しいと思います。

だから両方ですよ。ランキングもまた正しいというか、結果的にはあつてしかるべきという考え方。そして、ランキングはけしからんというか、そういうのはないというのを、またこれも正しい考え方ですね。あとはそれをどのように、こうした考え方を位置づけるかだと思うんです。

これは私個人の意見なので、違うという方もたくさんいると思いますが、まず世界遺産には、代表性が必ずあるわけですね。つまり唯一無二のものであるという、これは明らかにOUV(アウトスタンディング・ユニバーサル・バリュー)、「顕著な普遍的価値」があるものが登録されるということ、必ず価値づけが出てきます。

そして日本は、ユネスコの条約に加盟したのは、採択から二〇年後ですから、当初は、じゃあ日本は日本でいいじゃないかという考え方がたしかに強かつたんですよ。

しかし、今はもう世界遺産は日本の中でも揺るぎない位置づけがあります。その価値づけをするために、日本の文化財もまた価値づけされます。これは、世界遺産がなくても史跡とか、あるいは重要文化財とか、すでに価値づけがあるわけですよ。市町村の指定文化財が国に意

見具申をして、国の史跡になっていくということとは普通にありますよね。これもまたある意味価値づけになる。その国内での価値づけを大前提にして世界遺産が選ばれていく。だから当然のことながら、ランキングが出てくる。避けられないわけです。

だから、ランキング自体を批判はできないと思います。一方で、村の鎮守のほうは姫路城よりも偉いという考え方もあるわけですから、それはそれでしつかりとやる。どっちかじゃないと駄目なんだとなると、どうしても摩擦が出てくるわけです。だったら、文化財を守るという意味では、一つにはランキングという体系、そして、もう一つは、自分にとってはそういうものはないという体系が両方併存していればいいだけの話じゃないのかなと思います。

よく、世界遺産に選ばれなかったら、うちの大事な宝には価値がないんだとなってしまうところがありますが、それは間違いで、そういう考え方になるのは、世界遺産っていうランキングしか頭にないからそうなってしまうわけです。今は国が文化財保護法の改正で、地域を巻き込む形で保護施策を推進していますけれども、これには補助金が足りないから、地域に任せざるを得ないという事情もありますけれども、でも地域にとっての歴史遺産の意味って何だろう

ということを考える上では、すごくいい流れだと思いますよ。

そういうことで、小さな地域計画とか保存計画とか、いろいろと作られてきているわけなんですけれども、そういう意味では、両方の価値観というのが、少しずつ育ってきてるような流れがあるんじゃないのかなと思います。

それから活用の問題ですよね。稼ぐ文化となると、たしかに下品な言い方ですが、観光課にしても、その地域にしても都市にしても、個人的にはどんなやればいいなと思います。活用することによって、保護意識がさらに高まっていければ、こんないいことはないと思います。ただし、経済的一面倒で、保護の観点を切り捨てた活用には反対です。

うまくかみ合って進める必要がある。活用する、観光にする、地域おこしにする、それが、文化財を守る意識につながっていけば、こんなにいい循環はないと思います。それが一つ切り離されちゃって、観光だけになっていくともう守るという認識はなくなっていく。ならばそれは弊害でしょう。

世界遺産の場合は、二〇一二年にまとめられた京都ビジョンというのがあって、そこではSDGs、持続可能の中で捉えるべきという考え方で、地域おこしあつてが、それから観光なん

ですよね。文化庁も、稼ぐ文化より前に、河合隼雄さんが文化庁長官のときですが、関西力とか九州力とか、地域の文化をエネルギー源にしようという積極的な動きがありました。

古市 ありがとうございます。地域の中での活動となると、具体的に見ていくと多様なものがあると思うんですが。

中村 なかなかね、もう本当に言うは易しで、少なくとも以前は、観光や開発と文化財保護は敵同士で、常に対立するものと捉えがちでしたよね。でも今はそうでもないんじゃないのかなと思います。どっちかに偏るのがまずいわけで、その二つが何か新しい形でうまくやっていける、相對するものでも、共存というでもないと思うんですが、新しい形でやっていけるのがいいと思うんです。さっきの日本遺産ともちよつと違うんですけれども。

古市 そうですね。たとえば平城宮跡で、朱雀門や大極殿を復元していますが、復元にはいろいろな案があつて、今の建物には批判があつたりしますけれども、前向きに捉えるならば、建てたことでそういう批判も起こるということ、学問的に進んだ面もあるだろうし、市民もああいう建物があることで、広大な、見方によってはただの空き地ですからね、その空き地を市街地の中に保存させなきゃいけないという認識が

広がった部分もきつとあると思うんですよ。それに、文化遺産を持つている地域が生きていくためには、観光の要素も必要だとは思いますが、一方で、文化財本来のあり方とはかけ離れた、かなり恣意的なストーリーを作つて、観光資源化されるということになると、ちよつとそれはないんじゃないかなという、かなり違和感を感じるところです。

中村 ストーリーってなかなか難しいんですね。ただ世界遺産のシリアル・ノミネーションというものがあつて、そこでは必ずストーリーが必要になるんです。それは誰かが作り上げることもあります。

実は日本遺産でちよつと問題になつたのが、神武東征の道なんですよ。奈良県と宮崎県の双方で、神武東征の道をストーリーにして、日本遺産に持つていこうという動きがありました。やはり皇国史観とも絡んでくるので、これはさすがにまずいだらうということで、文化庁の自浄作用が働いたようなんですけれどもね。

古市 ストーリーとか、解釈するというのは、当然人間にとつて重要な営みだし、解釈することていろんな人たちが文化遺産の価値を理解するようになるとか、もちろんあると思うんで、ストーリー自体を否定しているわけじゃないんです。

中村 歴史解釈ですからね。

古市 それを何か、観光とかお金もうけのために、当事者が設定するところの不自然さがあるか、変に見えるというか、ちよつとどうなのかなと思つてしまふけれども。

中村 どうしても稼ぐのがあるきというのがありますよね。日本遺産も百件の撰定というのが、東京オリンピックに合わせて作られたものなんですよ。本来だったらこれは文化財保護の話ではないんですね。ストーリーを作つて地域おこしに文化財を活用しようということなので、保護という視点は明確にはないんです。たしかそうだったと思います。

だから、これは文化庁よりも観光庁がやるべきだったんじゃないのかという批判はありますし、そもそもオリンピックがあるときに百件を選んでいるわけですからね。本来なら、文化財の重文指定とか国宝指定のように、どんどんどんどん積み上がっていくもので、時間的なものがあるはずがない。ところが、今は百件かあるんですけども、それ以上は増やさないという、つまり、時限立法的なところがあること自体がおかしいですよ。

だから文化財保護とは、相容れない話ではあると思います。今、何件か、削除しようという話があつたりするんです。何で出てきているか

といえば、日本遺産に認定しても、それだけで、市町村の努力がないという話なんです。そもそも努力してストーリーを作つて活動するものではないんですけれども、でもそれが日本遺産なんですよ。

何もしないんだつたら補助金は出しませんよという、きわめて明快な話です。つまり文化遺産、国指定の文化財だったら、国庫補助がこれこれかかるとかいろいろありますけれども、それは守らなくてはいいけない、保存するために必要だからお金を与えるというわけなんですけれども、日本遺産の場合は、それで地域おこしということ、そういうふうに使つて活用してくださいというのが主眼ですから、もしそれが停滞するならば、じゃあ税金はあげませんという、きわめて分かりやすい話です。当然の話ですね。その違いというのは明らかにありますよね。

四 ジャーナリズム、専門知の今後

(一) ネットニュースと新聞記事

古市 ありがとうございます。いかがでしょう。もうそろそろ締めにかからないといけないのですが、もしお聞きになりたいことがあればと思います。

井上 私が日頃関わっているのは、あまり大きな文化財とかではなくて、小さな地域の中から出てきた古文書などなんですけれども、それでも結構新聞記事に取り上げていただけることがあります。先ほどのお話の中で、新聞記事を書くときの5W1Hで、いろんなものをそぎ落としていくんだというお話をされたかと思うんですけど、私も、私たちのところに取材に来られるのは地方支局の方が多いのですが、こつちがいろいろと一生懸命しゃべるんですけど、最終的にすごくそぎ落とされた記事になっついて、こちらが意図したことがうまく伝わっていないというところ、こんなこと、こんな話だったっけということがたまにあります。もちろんその記者の方が歴史に興味をお持ちかどうかというところもあると思うんですけど、こちらの方でも、伝えたいことを記者の方に伝えるために、どういうところを意図しながらお話しすればうまく伝わるのかなっついていうところを伺えますか。

中村 記者個人によつてだいぶ違いますね。ある程度知識がある記者なら問題ないわけですが、そうでない場合には、さつき行政のプレスリリースで言つたみたいに、「何とかの大発見！」みたいな、そこまでするかというような、もう横を縦にするだけでも記事になるくらいのも



もたくさんあるわけですよ。なので、意図するものを書いてもらいたいというんだつたら、本当に横を縦にするだけのやつが一番いいですよ。ただし、ジャーナリズムから見ると、どうかなとは思いますが。

井上 記者の方によく聞かれるのは、「何が珍しいんですか、一言で言えば、どうなんですか」ということで、それに対して、たとえば記事の見出しのビックリマークみたいな形で答えられたらいいんですけど、そこはやはり答えにくいところもあつて、ふんわりと話していると、記事にも結局、ふんわりとしたところしか使われなくて。

中村 そうですね。そういう記者には、まず何が重要なのかということが、たぶん頭の中に用意できていないからでしょうね。身も蓋もない言い方ですけども。僕らみたいな昔の世代だと、取材の前にはこれが重要だから、これを書きたいからということで勉強して、そして取材に行くんだということになっていました。記事つて、ある程度、何がこういうものなのかというのがちゃんとわかってないと、書けないものなんですよね。

井上 先ほどから、新聞記事に関して、ドラスティックな見出しの方が受けるみたいな話も出ていましたが、インターネットに上がってくる

新聞記事では、おそらくアクセス数なんかも関係してくると思うんですね。そうするとネットでどれほど閲覧されているのかとか、写真映えとか、タイトルとか、そうしたところでいかにクリックしてもらえるかというところが、この先すごく大事になってくると思うんですが、そのあたり、今後、文化財も含めて、新聞や報道の形がどのように変わっていくのかなというのが気になります。

中村 とても大事なことを聞いていただきまして、これについてはいくらでも話せるんですが、簡単に言えば、もうかなり厳しいことになっています。これまでの報道は成り立たないところまで来ていると思います。

まず、インターネットが出てきた時点で、文化財とか文化部の記事に限らず、報道のやり方は百八十度変わっていつているんですね。新聞、テレビ、ラジオ、雑誌、そういういわゆる旧メディアは、無限の情報の中から自分たちが一方的に選択して、そして読者や視聴者に一方的に流していたわけです。選択の主体性というのはメディアにあつたわけです。それが果たしていることなのか悪いことなのかは別として、そういう形だったんです。つまり、情報はメディアが独占していたんです。

ところがインターネットはまったく逆なんで

すよね。無限のネット情報を誰もが手に取れるようになった。つまり選択から無限に開放された。これが二〇〇〇年のはじめから、ネットが普及したことで、正反対の立場になったということなんですよ。

ネットのニュースの中には我々の記事もかなり含まれているんですが、会社はなるべく読まれるもの、つまりセンセーショナルなもの、おもしろいものを書けと言っています。政治とかしち面倒くさいものみたいに、新聞がこれまで扱ってきたようなものは、はつきり言つて、PV（ページ・ビュー。ウェブの総アクセス数）もCV（コンバージョン。商品の購入や会員の登録など、ウェブサイトで達成した成果）もつきません。ネットの情報は、そういう価値観で選ばれているわけです。では我々は、おもしろおかしいものばかりを書けばいいのかという、非常に危機的な状況になってきています。

調査報道とか言ってもですね、ニューヨークタイムズは成功したみたいですけど、ほとんどがうまくいってないんですよ。日本の新聞では、デジタルで成功しているのは日経ぐらいです。日経は経済紙ですから、経済情報はビジネスマンに必要なものなんですよ。デジタルと非常に親和性がある。

ところが、文化とか、あるいはスポーツとか、

あるいは難しい政治とか、情報としては必要なんだけれど、あまり読まれない、読まれないけど必要なだつていうような情報は、新聞が一般紙がやってきたことなんですけれども、SNSの世界では軒並み弱ってきています。それはそうですよね。いわゆる市場原理っていうものなんです。こうなってきたときに、ジャーナリズムは一体生き残れるのかというのが、今の僕らの課題なんです。

ただ、フェイク・ニュースがこれだけ氾濫してきている中で、無限の情報の中で一体何が正しいのか正しくないのか、真実は何なのかということが分からなくなってきていますよね。その中で、必要なのは情報を選び出す力なんですね。

では一般の人たちが、どれほど正確にチョイスできるかというと、それはないでしょう。僕らにだつてありません。フェイク・ニュースがもう普通に信じられている世界ですからね。それがアメリカの政治を動かしているような世界ですから。

我々旧メディアが生き残る余地があるのは、長くやってきたキャリアと、それに対する信頼性だと思います。信頼のある検索エンジンみたいな役割が、旧メディアにはおそらく必要だと思ふし、社会の中で求められていると思います。

正しいものは一体何なのか。新聞には、一〇〇年以上の歴史があります。その中では戦中の報道のあり方もあって、それに対する反省と読者からの批判、またそれ以降も批判と反省をくり返して、そして信頼性を得てきたわけです。

これから、無尽蔵にあるネットの情報を、ある程度、これは大丈夫ですよという枠組みを作れるのは、文化財にしても何にしても、文化報道にしても、今のところ旧メディアしかないんじゃないのかなという気がしています。もちろん、五〇年後は分かりませんよ。分かんないけれども、長い歴史の中で読者と一緒に作り上げてきた信頼性があるとするならば、おそらく今それが一番求められているんじゃないのかな。そこに旧メディアの活動と存在意義を見出したいなと思っています。

(二) 専門知のあり方をめぐって

市沢 今のお話は、選択する力量というか、要するに何がフェイクで何がそうでないかを見分けていくということでしたが、私たちの『リンク』という雑誌には、専門知と社会の関係をどういうふうにかえるかというところに、一つの課題があるんですけど、いま、専門知自体が、すごく激しく揺さぶられているという点で、今

のお話と似たような問題があるんだろうなと思います。

最近、『土偶を読む』という本をめぐる騒動が起こってます。その本をめぐる中島岳志さんたちとの対談の中で、著者の方が専門知に対する疑問をはつきりと言ってるんですね。福島原発事故が例に取り上げられていて、世間では原発が危険だとあれだけ言っていたけれど、そういう意見を専門知は聞かなかつたんだということが言われているんです。それに対して、専門知として、この問題を放っておくわけにはいかないというので、『土偶を読む』を読む』が出て、反論されたという経緯があります。

ある種、専門知から離れたところで、自由にみんなが議論すべきだというような、今日的な問題が、この論争には出ているんだろうなと思います。中村さんから見て、この『土偶を読む』事件をどのように思われるか、伺いたいと思います。

中村 そうですね、この件ではまさに専門知のあり方が議論されているわけですけれども、著者は、土偶に対するこうした考え方を専門家に持っていて、一蹴された、せせら笑われた

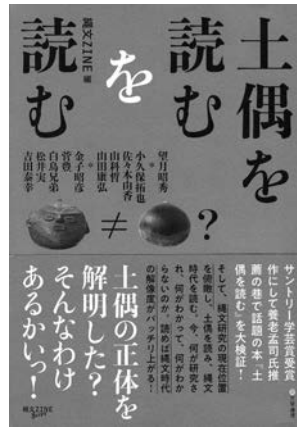


と書いていたと思います。これは、先ほどの邪馬台国論争や、原田大六氏の、アカデミズムに対するルサンチマン的な攻撃と一緒にそうですね。結局、専門知への批判は、反アカデミズムという形で、昔からずっとあるわけです。ただ、専門知をやり玉に上げられるだけの、かなりの知識が一般市民に高まってきているのはたしかだと思っています。

『土偶を読む』がヒットしたのは、世間で評価の高いサントリー学芸賞が与えられたこともあるでしょう。たしかに、視点はおもしろい、



竹倉史人『土偶を読む』
(晶文社・帯)



望月昭秀編『土偶を読むを
読む』(文学通信・帯)

おもしろいけれども、それを公表して、批判を受けて、そしてその中で生き残っていくというような、やはり学問上の手続きというのがありますよね。そのコンセンサスの形成を飛ばしているのが『土偶を読む』ではないでしょうか。コンセンサスを飛ばして、単行本という形で社会に直接、「さあ皆さん、どうぞですか」と出して、「いやそれは聞いたことないね、おもしろいよね」というふうになつくとベストセラーになる。それをサントリー学芸賞という、むしろ専門知

のほうが不用意にオーソライズしてしまったというような構図だと思います。

『土偶を読むを読む』は、さすがにこれはおかしいなということで、いろんな分野の方の意見が寄せられてますが、本当の土偶の専門家はいないんですよ。あれは、専門知からの反論にはなっていないですよ。結局、ポピュリズムの中での応酬みたいな感じ。先ほどの、あつちの郷土愛とこつちの郷土愛のぶつかり合いみたいになっているように思えます。

もし『土偶を読む』が本当におかしいのなら、学会で取り上げてほしいと思うんですよ。しかし、これは触れませんが、学会は。邪馬台国論争に学会が触れないのと一緒ですね。触れたら、ポピュリズムを敵に回すことになるんで、その恐ろしさもあるでしょうし、サントリー学芸賞、何でああいうのに乗ったのかなという感じはするんですけどね。でもそれがまた箔づけしてしまった。

『土偶を読む』の著者は、文化人類学者ですが、これはきわめて個人的な意見ですが、一番厳しい、苦しい手続きを逃がたしと思えないんですよ。本当にやるんだつたら真つ向から、正面から戦つて、微塵に粉砕されればいいだけの話です。それを逃げて、理解がされないから、笑われたからということで、一つの単行本として、

そのまま刊行するのは、おかしいと思います。

二〇年ほど前でしようか、ある有名なエジプトの研究者が、自分の展覧会を公共の博物館で行う、この成果ははじめてのことなんだと、記者会見をやりました。その方に、「これは学会の中でどういう捉えられ方をしているのか」と聞くと、「学会なんか出していないよ」つて言うわけです。「私は学会なんか信用してない」と。「ああ、そうですか。でも、正しいことを書くのが新聞ですので、もし新発見なら、可能な限りほかの意見も並べて書きたいんです。これは一方的に絶対に正しいと言われても、それはうのみにできません」と言うと、「学会なんて知らない、私が頼みにするのは、皆さん市民だ」となつて、ほげけんか状態になりました。信じるのは結構かもしれませんが、それで新聞は書けない。

『土偶を読む』の一件は、これと非常に似ていると思います。そのまま市民社会に、単行本という形で投げかける。そして、売れる、それを推薦するのもまったく畑違いの人たちで、これは画期的な見方だ、多分アカデミズムの中からこういう考え方は生まれえない、となる。たしかにそうかもしれないですけども、今度はそれが独り歩きして、あれは植物や貝類ですか、何かそういうものをかたどつたのが土偶である

ということが、ヒットしたことによって、社会の中で一番正しい見方ということになってくると思います。これはちよつと危ない話ですよ。

司馬遼太郎さんは、自身の作品について、「これはあくまでも歴史小説である、真実じゃない」とずつとおっしゃっていました。いま、市民社会での坂本龍馬の像は、司馬遼太郎の『竜馬がゆく』が作った世界ですよ。では、それがはたして歴史なのか歴史じゃないのかについて、歴史はドラマや小説とは違うということをアウトプットしていく責任は、歴史学の学会にはあると思います。

今こそ、アカデミズムは社会に向けてどんどん開放していかなくちゃならないんだという流れになっていると思います。かつて象牙の塔の中で活動ができたのは、戦前の、インテリが本当に限られていた社会だったからだと思います。でも、ここまで市民のレベルが高まってきているのであれば、学会は閉鎖的であつてはいけません、逆にそこから発信していく必要がある。神戸大学をはじめ、大学というアカデミズムが地域社会に入っていないかなくてはならないのかという理由は、一つには、おそらく今のような話があるのかもしれないと思います。

市沢 ありがとうございます。

古市 私たちの活動に関する貴重なご提言だと

思います。最後にもう一点だけ、中村さんご自身のことでお伺いしたいのですけれども、記者として日常的に記事をお書きになっているわけですが、それとは別に、論文という形で執筆されたり、またそれを著書にまとめられるということもずつと継続的になさっておられると思うんですけども、なかなか、普通の記者の方はされないことではないかと思います。そのことをどうお考えになっているのか、お伺いできればと思います。

中村 継続できているのは、三〇年間、ずつと文化部にいるからです。あまり例のないことで、これはある意味、偶然というか、会社の考え方というか、でもそれをやることによって、やはり蓄積は必ずできるので、会社には感謝しています。ならば、その蓄積された物の考え方とか、その成果をどう還元するかということになってきます。もちろん新聞がメインですけれども、でもいろんな形で還元するのは当然ですよ。新聞は、本当に限られたスペースしかありません。よく、一〇取材して一を書くと言います。あとの九は全部捨てているわけなんですけれども、それはあまりにもつたいない。



それを、機会があればいろんな形で社会に還元していく。新聞でできないことや、自分の考え方とかは基本的には新聞に出せませんので、ちよつと個人的な考え方も絡めながら、いろんな形で広く発信していくというのは、これは当然だと思います。その形が本であつたり、あるいは論文であつたり、ほかの大学でしゃべつてみたり、シンポジウムで司会を試みたり、パ

ネリストになってみたり、そういう活動なんですね。

新聞も今は昔と違いまして、ある程度専門的な知識とキャリアを持つている編集委員クラスの記者は、そんなに数もいません。だから編集委員はそういう活動をどんなしなさいと言われていきます。テレビに出る人もいますしね、アウトプットの仕方はいろいろです。私の場合は、特に本を書いたり、論文を書いたり、司会をしたりとか、そういう形を取っているということですね。まだまだ書けないものもたくさんあるんですけど。

取材して、取材対象の好意でいろいろと教えてもらった情報をため込んでいるものですから、やはり自分自身だけにため込むわけにはいかないわけですよ。社会からもらっているものですから、それは還元しなくちゃいけない。もうお金の問題ではないんですね。格好よく言えばそういうことです。基本的に書くのが好きで、本当にシンプルにそういうことです。社会還元の一環として。

古市 今日は長時間にわたるインタビューでした。本当にありがとうございました。

インタビュー日時 二〇二三年八月二日